目白大学　健康科学研究
第1号　2008年　149-158

国内外における看護実践能力に関する研究の動向
—看護基礎教育における看護実践能力育成との関連—

神原裕子　荒川千秋　佐藤亜月子　吉野由紀江　川中淑恵　杉本龍子　関根龍子
(Yuko KAMBARA　Chiaki ARAKAWA　Atsuko SATO　Yukie YOSHINO
Yoshie KAWANAKA　Ryuko SUGUMOTO　Ryuko SEKINE)

【要旨】

医療の質改革や高度医療の一端を担う看護の役割拡大の流れに沿って、看護実践能力の育成に関心が向けられている。本学看護学部においても、看護実践能力育成の教育方法の検討を進めるにあたり、看護実践能力の共通認識を図ることが必要である。

そこで、看護基礎教育における看護実践能力育成のための資料を得ることを目的に、国内、国外の文献を検討した。その結果、1．国内の研究に比べ国外の研究は、看護の専門領域に絞った研究が多かった、2．看護実践能力の定義は、研究者によって様々で、統一されていないが、共通する構成要素を挙げている研究が多かった、3．研究目的を看護基礎教育に活かす視点から考察した結果、看護実践能力の解明や看護実践能力の育成に向けた教育・評価の研究は、新人看護師や看護師対象には行われていたが、看護大学生に対しては、専門科目ごとの教育に留まっていた。

キーワード：看護実践能力、看護基礎教育、大学教育

Ⅰ．研究の背景

医療の質改革や高度医療の一端を担う看護の役割拡大の流れに沿って[25]、看護実践能力の育成に関心が向けられている。看護実践能力の育成が、今日のように表立って強調される原因には、医療現場のニーズと新人看護師の看護実践能力の低下の二つが考えられ、中でも新人看護師の看護実践能力の低下は看護の質を保障する上で大きな課題になっている。このほど「看護基礎教育の充実に関する検討会報告書」[26]に示された「統合分野」の新設などは、そのことを如実に表わしており、臨床での教育だけに任せず、看護基礎教育段階から本格的に看護実践能力育成に取り組んでいくことが望まれている、といえよう。

目白大学看護学部は2006年に開学したばかりの新しい組織だが、看護実践能力の育成に重点を置いている点が特徴である。4年間のカリキュラム全般にわたり、看護実践能力育成のための教育方法を織り込み、工夫していくことは、社会的な要請を受ける意味でも重要なことである。

看護実践能力育成のための教育方法の検討を進めるにあたっては、まず、「看護実践能力」の概念的な共通認識を図る必要がある。また、看護実践能力をどのように測るのか、看護実践能力を育成する教育や評価はどのようになされるのかなど、確認しなければならないことも多い。そこで、大学教育における看護実践能力の育成に活用できる参考資料を得るために、看護実践能力に関連のある国内外の文献を検討したので、その結果を報告する。

かんばらゆうこ：看護学部看護学科
あらかわちあき：看護学部看護学科
さとうあつこ：看護学部看護学科
よしのゆきえ：看護学部看護学科
かわなかよしえ：看護学部看護学科
すぎもとりゅうこ：看護学部看護学科
せきねりゅうこ：看護学部看護学科

Ⅱ．研究目的

看護実践能力に関する国内外の文献の動向を把握し、看護基礎教育に活用できる資料を得ることを目的とする。

Ⅲ．研究方法

1．文献検索

1）MEDLINE

検索期間を「1950 to Present with Daily update」とし、8月1日にMEDLINEでキーワード①「nursing practice」②「competency」③「education」で検索を行った。その結果、82件が抽出された。

2）医学中央雑誌

検索対象年を「1983年～2007年」とし、医中誌web ver.4でキーワード①「看護実践」②「能力」③「教育」で検索を行った。その結果150件が抽出された。

2．除外文献

抄録のない文献とレビュー文献は除外した。また、論文内容が看護実践能力の育成と関連性が低いもの、研究論文の形式をとらない報告書は除外した。

3．文献検討方法

まず、文献を年代別に、研究テーマ、研究目的、研究方法、研究対象、結論の項目で整理した。その後、看護基礎教育に参考となる視点、すなわち、1）看護実践能力とは何か、2）看護実践能力をどのように測るか、3）看護実践能力を育成する教育方法、評価とはどのようなものか、の3つの視点から検討した。

Ⅲ．研究結果

1．看護実践能力に関する文献の概要

検索された看護実践能力に関連する和文文献150件、英文文献82件のうち、抄録のない文献やレビュー文献、研究目的に合致しない、入手できないなどの理由で削除された文献は、和文文献62件、英文文献24件となり、最終的な研究対象文献数は、和文文献88件、英文文献58件となった。

1）国内における研究の動向

看護実践能力に関連する研究は、国内では1997年ごろから行われ、以降現在に至るまで研究が行われている。研究対象となった文献の年代別文献数を表1に示したが、2003年が最も多く18件、続いて2005年17件、2004年15件、2006年14件と、2003年～2006年の間に全体の約73％の研究が報告されていた。2007年は、5件だが今後さらに増加が予測される。

研究目的で主なものは看護実践能力とは何かを問うもの[39][50]、看護実践能力の構成要素を検討するもの[51]、看護実践能力の測定尺度の開発[28]、看護実践能力の教育方法や教育プログラムの開発、看護実践能力の教育評価[45][55]、などであった。研究対象は、看護学生（大学生、短大生、専門学校生）、看護師（新人看護師、中堅看護師、専門領域の看護師、認定看護師）、看護教員、その他（在宅でサービスを受ける療養者とその家族）などであった。

2）国外における研究の動向

国外での研究は、1980年ごろからみられ、アメリカ、イギリス、オーストラリア、アジア地域において研究が行われていた。国別では、アメリカが最も多く、次いでイギリス、オーストラリアであった。

年代別の傾向は、看護師が行う創傷のデブリメントの実態調査[15]や、新卒救急看護師に必要な臨床能力[44]、静脈内注射の技術レベルを示した研究[10]、など、具体的な実践内容に関連した研究が、1990年代に多く行われていた。大学や病院、在宅における看護実践能力の教育プログラムの開発や教育評価の研究は、1990年代から少しずつ行われ、2000年以降さらに増加していた。

研究目的の主なものをおおまかに述べると、特定の領域（緩和ケア[7]、地域看護[9]、公衆衛生[1]、産業保健看護[33]、ICU[16]、文化的コンピテンシー[8]、痛みのマネジメント[31]、国際的な看護教育[12]）の看護実践能力育成のための教育プログラムの開発、看護学博士のカリキュラムにエビデンスに基づく看護実践を導入する提案[6]、大学や臨床での教育方法・教育評価の検討[14]、看護実践能力の発達に影響する要因の探索と検討の研究[27]などが報告されていた。

研究対象は、看護大学生、看護師（登録前看護師、登録看護師、上級実践看護師）、教員、などであった。研究方法は、調査研究が多く全体の約30％であったが、事例研究も全体の約3％行われていた。

2．看護実践能力の定義

看護実践能力を論文内で定義している国内文献を抽出し、その内容を整理したものが、表1である。ここでは、看護実践能力と表記しているが、取り上げた文献では他に「実践能力」や「臨床実践能力」、「看護実

表1　看護実践能力の定義

年代	文献数	定義あり文献	定義（構成要素）
2007	5	0	
2006	14	0	
2005	17	3	吉田[57] 看護実践能力：臨床における看護の実践活動に必要な最小限の技能化された能力。看護過程展開能力、援助的対人関係能力、看護技術力、メンバーシップ・リーダーシップ、看護倫理、学習姿勢の6つのカテゴリーからなる総合的な能力。この能力は実践の際は分かちがたく統合的に発揮される。
			寺澤ら[50] 看護実践能力：看護ケア実践（対象理解、直接的ケア、看護過程、教育指導）、組織調整力（メンバーの役割、リーダーシップ、後輩指導、他職との協働）、専門職性（倫理、主体性、研究、救援）。
			中岡ら[36] 実践能力：実践能力は、看護を実践するうえで必要な能力を意味し、Schwirian. P. M.（1978）が捉えた6つの要素で構成される。リーダーシップ、クリティカルケア、教育/協力、計画/評価、人間関係/コミュニケーション、専門職的発達。
2004	15	5	道廣ら[28] ストーマ看護実践能力：ストーマを造設した患者のセルフケア技術の習得と社会的復帰をねらいとして展開される、一連の看護過程に求められる諸能力。
			山崎ら[53] 看護実践能力とは、患者に安全安楽に看護技術を提供できる能力をいう。
			中野ら[37] 臨床実践能力：日常生活援助や診療に伴う援助を中心とした直接的なケアにおいて知識、判断、コミュニケーション技能、手順的技能が総合されたものに加え、看護業務を遂行する上での能率性をあわせたものである。
			有森ら[4] 一般看護職者の実践能力；免許を有する全看護職者に必要とされる能力（一般看護職・Basic Level）であり、遺伝専門看護職もこの実践能力が必要とされる。遺伝専門看護職の実践能力：Basic Levelにある一般看護職が、さらに専門的知識・技術を習得して遺伝専門看護職（遺伝専門看護職・Advanced Level）となったとき必要とされる能力とする。
			倉田[24] 看護実践能力：看護の対象の状況を適切に判断し、その上で適切な看護方法を選択し実践に移すことができること。
2003	18	4	沖ら[41] 看護実践能力：患者の状態に応じた適切な看護サービス（健康増進、疾病予防、病気、障害）を提供するために豊富な知識を正確な技術等を統合し、実践する能力であり、それは、看護ケアの計画立案、実施、評価という機能を共に遂行するものである。
			吉田ら[55] 看護実践力：看護を実践する際、総合的に発揮される知識、技術、態度。具体的には、対人関係能力、対象理解能力、看護過程展開能力、看護技術力、チームワーク形成能力、専門職業意識を含むものとする。
			藤野[13] 看護実践能力：多様な生活史、長い人生で培った価値観・信念と個別性をもった高齢者を対象とし、その特徴と加齢変化を的確に捉え、高齢者の健康特性は何かを考慮しながら、高齢者が健康で自立した生活を維持するための看護援助ができる。
			八田[54] 看護実践能力：聖マリアンナ医科大学病院で使用しているクリニカルラダーで、看護実践（情報収集、問題の明確化、実践、評価）看護教育、看護研究、看護管理の各能力を統合したもの。
2002	5	1	吉田ら[56] 看護実践力：看護を実際する際、統合的に発揮される知識・技術・態度。具体的には、対人関係能力、対象理解能力、看護過程展開能力、看護技術力、チームワーク形成能力、専門職業意識を含む。
2001	7	0	
2000	5	0	
1999	1	1	山田ら[58] 看護者の責務を遂行するために看護のあらゆる領域において最小限具備しなければならない技能化された能力。
1998	0	0	
1997	1	0	

践力」という表記が用いられていたため、それぞれの表記をそのまま表にした。

看護実践能力および実践能力、臨床実践能力、看護実践力を定義している文献数は14件で、全文献数の16%であり、定義のない文献が定義のある文献よりも多かった。

定義内容をみると、Schwirian. P. M.[43]により1978年に開発された6-DS（Six Dimension Scale）の日本語版の表現を用いているものやパトリシア・ベナー[5]のクリニカルラダーをもとに定義しているもの、独自の定義を示しているものなど、さまざまだった。

定義の中で、看護実践能力を構成する要素を述べている研究が多く、そこに共通に認められる要素は、「リーダーシップ・メンバーシップ」、「看護過程展開能力」、「対人関係能力・コミュニケーション能力」、「看護技術力」、「教育」、「看護倫理観」、「看護研究」、「専門職性」などであった。

看護実践能力を独自に定義しているものでは、「患者に安全・安楽に技術を提供できる能力」というシンプルなもの、また、「業務遂行」、「実践できる」を文末に用い、実践の部分を強調した表現や、「知識、技術、態度などを統合した能力」などのように備えるべき能力を表現したもの、などがあった。

3．看護実践能力に関する研究目的の動向

国内論文の中から看護大学生と新人看護師（ここでは、一般的に用いられる看護基礎教育終了後1年以内の看護師とする）、看護師（新人看護師を除く）を対象とした論文に限定して、研究目的を次の3つの視点から分類したのが、表2である。これは、看護実践能力の研究動向を、看護基礎教育に活かす視点から検討するためである。

3つの視点は、1）看護実践能力とは何か、2）看護実践能力をどのように測るか、3）看護実践能力育成のための教育方法、評価とはどのようなものか、である。1）には看護実践能力の解明を目的とした研究を分類し、2）には看護実践能力の測定方法の開発を目的とした研究を、3）には看護実践能力教育の方法や評価の開発を目的とした研究を分類した。以下、この分類にそって結果を述べる。

1）看護大学生対象の研究（表2内：●）

看護大学生を対象とする看護実践能力の解明を目的とした研究には、学生が知覚する看護学教員のロールモデル行動を明らかにし、看護実践能力のなかで何を重要とするかを明らかにする研究[32]が行われていた。

教育方法・評価については、地域看護実習方法[17]や地区活動演習の評価結果を報告した研究[52]、母性看護実習のプレテストとポストテスト間での学習変容の変化を評価した研究[35]、基礎看護学領域の技術演習の検討をした研究[23]があった。独自に作成した看護技術チェック表の活用状況を調査した研究[11]、また卒業前の看護学生の看護基本技術の自立度の実態を調査した研究[39]があった。

2）新人看護師対象の研究（表2内：★）

新人看護師を対象とした看護実践能力を解明する研究は、新人看護師の看護実践能力および成長度を経過を追って調査している研究[49]や修得過程を明らかにする研究[18]が行われていた。新人看護師とは、一般に卒業後一年以内を指すことが多いが、ここでの研究では2年間の経過を追ったものがあった。また、新人看護師を指導する先輩看護師と指導を受ける新人看護師の間で、臨床看護実践能力の到達度期待度と到達度の認識に違いはあるかを明らかにする研究[42]が行われていた。

新人看護師の看護実践能力を育成する教育方法・評価に関する研究は、新カリキュラムによる教育を受けた卒業生たちの看護実践能力を評価した研究[56]が行われていた。研究者の所属が看護専門学校であることから新人看護師はすべて看護専門学校の卒業という条件だが、コミュニケーション能力のほうが看護過程展開能力よりも高い結果が得られていた。

3）看護師対象の研究（表2内：■）

看護師を対象とした看護実践能力を解明する研究は、臨床実践能力の高い看護師のコンピテンシーの内容とその獲得に影響する経験についての研究[2]、看護ケアと看護実践能力の関連を明らかにする研究[38]、看護師の卓越した看護実践を明らかにし、特徴を考察する研究[51]、大卒の看護師が認識している看護実践能力を短大、専門学校卒の看護師と比較する研究[36]、ドナルド・ショーンにおける「反省的実践」を看護の分野における「反省的看護実践」として再構築し、基礎的理論の試案を描写した研究[19]、日常の看護実践をどのように自己認知しているか基礎教育の視点から分析した研究[20]などがあった。

看護師の看護実践能力を育成するための教育方法・評価の研究は、看護師の教育ニーズを把握する研究[45]、

表2　看護実践能力の視点別の研究目的

●：看護大学生対象　★：新人看護師対象　■：看護師対象

年代	1）看護実践能力とは何か	2）看護実践能力をどのように測るか	3）看護実践能力を育成する教育方法、評価
2007			●看護大学生対象 細谷ら[17] 学士課程における地区活動の看護実践能力習得をめざした地域看護実習方法の検討する 遠藤ら[11] 修得すべき看護技術項目リストと卒業時の到達レベルを設定した看護技術チェック表を作成し、その活用状況を明らかにする ★新人看護師対象 野呂瀬[34] 新人看護師の看護実践能力の修得過程とその支援について明らかにする
2005	★■新人看護師・看護師対象 南家ら[38] 看護ケアの質と看護実践能力の関連を明らかにする ■看護師対象 朝倉[2] 臨床実践能力の高い看護師にどのようなコンピテンシーがあり、どのような経験が獲得に影響するのか明らかにする 上田ら[51] 病院に就業する看護師の卓越した看護実践を明らかにし特徴を考察する 中岡ら[36] 大卒看護師の看護実践能力について看護基礎教育と実践力の関連性、その影響要因などを短大および専門学校卒の看護師と比較することにより明らかにする		●看護大学生対象 内藤ら[35] 母性看護実習時のプレテストとポストテスト時の学習変容を検討する 牛尾ら[52] 地区活動演習の成果と改善点を明らかにする ★新人看護師対象 吉田ら[57] 新卒看護師の看護実践能力および成長度を把握し学習経験との関連を検討することで看護基礎教育の評価を行う
2004	★新人看護師対象 中野ら[37] 臨床実践能力の就職後2年間の経年的変化を明らかにする 高島ら[49] 就職直後から12ヶ月間の看護技術を含む看護実践能力及び社会的スキル修得の状況とそれらの関連を明らかにする 山崎ら[53] 新人看護師の就職時の基礎看護技術チェック合格と経験との関連を明らかにする	★■新人看護師・看護師対象 道廣ら[28] ストーマに必要とされる看護実践能力の測定尺度を開発する	●看護大学生対象 野戸ら[39] 大学教育における看護基本技術教育の在り方を探求する研究の一環として、卒業前の看護学生の看護基本技術の自立度の実態および両者の関連を明らかにする
2003	★■新人看護師・看護師対象 大木[42] 臨床看護実践能力の到達度期待度と到達度の認識に違いがあるのかを明らかにする 石野ら[20] 日常の看護実践をどのように自己認知しているか看護基礎教育の視点から分析する ■看護師対象 本田[19] 「反省的実践」の基本的理論が看護の具体的事象においてどのように展開できるか検討する		●看護大学生対象 川嶋ら[23] 基礎看護学領域において展開してきた技術演習を、教育内容への評価・見直しを行う 武藤ら[29] 地域看護学領域における看護実践能力の向上をめざす到達目標を用いた教育方法を検討する ★■新人看護師・看護師対象 志田[45] 効果的な院内教育にするために、教育を受けるスタッフの「苦手な看護実践能力であり、院内教育おいて教育補強すべき部分」を把握する、またスタッフの個別的背景を知る、状況に応じた教育を行えるように配慮する

中堅看護師の看護実践上の課題を明らかにし、課題解決のための学習方法や内容を明らかにするとともにその学習方法の有効性を明らかにする研究[3]が行われていた。

看護系大学生、新人看護師、看護師（新人看護師を除く）を対象とした看護実践能力の尺度開発研究は、唯一看護師対象に1件だけ行われており、ストーマケア実践能力を測る尺度開発の研究（28）があった。

Ⅳ．考察

1．看護実践能力に関連する研究の動向

看護実践能力に関連する研究は、看護の専門領域に焦点を絞ったものが多く、さらに国内より国外においてその傾向が強かった。諸外国の看護基礎教育制度や看護師資格取得制度は、国ごとに違いがあり、それに伴って看護実践能力の育成に伴う課題も違いがあると考えられる。たとえば、アメリカの場合には、修士課程や博士課程を修了した上級実践看護師が行う業務は、登録看護師の業務に加えて処方権をもつ[22]。また、イギリスの学士教育においては、看護基礎教育の段階で看護専門領域を決定し、専門領域の看護教育を受ける教育制度がとられている[47]ため、看護基礎教育で求める看護実践能力が日本と違っている可能性がある。

専門領域に焦点を絞った研究テーマが多い背景には、このような事情があるものと考えられるが、1994年以降、日本でも専門看護師制度が確立し、引き続き認定看護師制度も確立されて、高度医療の一翼を担うようになってきている。日本における看護実践は専門分化の方向に進む可能性が高く、諸外国の動向を把握しながら日本の現状を把握することは、看護実践能力の検討には欠かせない。しかし、本研究の研究目的から若干ずれること、また、研究対象文献だけから全容を把握することは困難であること、看護実践能力は資格制度や医療政策などもあわせて検討することが必要であることなどから、今後の検討課題とする。

ただし、参考になる資料として、アメリカ看護師協会から出されている「看護実践の範囲と規準」[22]がある。これは、2004年に改訂され、実践基準や専門職業務遂行基準、測定基準の最新版が示されている。内容をみると、看護師と上級実践看護師の実践基準が分けて示されており、アメリカにおける看護実践基準を知る上で参考なる。また、ICN（国際看護師協会）は、2003年に「ジェネラリスト・ナースの国際能力基準フレームワーク」[22]を発表した。グローバル化が進む世界にあって、看護師の国際的な移動も活発に行われており、スペシャリストではないジェネラリストの能力基準が示されることは、必要に迫られた感がある。日本の看護基礎教育の視点からは、この基準をカリキュラム検討の参考にすることが可能である。

国内の場合には、2003年から2006年の4年間に多くの研究報告があった。この時期には医療政策改革ビジョン[25]が示され、看護においては2003年以降、文部科学省から「看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標」（2004）と厚生労働省から「新人看護職員の臨床実践能力の向上に関する検討会報告書」（2003）が出されており、少なからずその影響があったと考えられる。しかし、看護基礎教育での看護実践能力の教育は、整備された形での導入までには至らず、2007年4月に、「看護基礎教育の充実に関する検討会報告書」が出されてからは、早急な対応が迫られる形となった。これまであまり関心がもたれなかった看護基礎教育における看護実践能力の育成は、現実の課題として浮上し、具体的な検討段階に移行しつつあると考えられる。

2．看護実践能力の定義について

看護実践能力に関する共通認識を図るための資料を得るために、対象文献における定義を整理した。表1のとおり結果はさまざまで、看護実践能力が具体的にどのような能力を指すのか、共通認識に活用できるようなレベルで明確にされていないことが明らかになった。白尾ら[46]が、2001年に報告している同様の研究でも、「看護実践の能力に関する概念は様々であり、定義づけがされているものが少なく、さらにその構成要素も研究者によって異なっていた。」のように述べられており、2002年以降の研究においても定義の明らかでない研究報告が多く、看護実践能力の共通認識を図るのは難しい段階にあると判断される。この分野での研究が推進されることが期待される。

看護実践能力の構成要素は複数の研究で示されていたが、表現内容から、参考にされていたのはSchwirian. P. M.[43]によって開発された看護実践能力の測定尺度である、6-DS（Six Dimension Scale）と推測された。これは、日本語改訂版[40]も作成されている。6-DSの下位尺度は、リーダーシップ、クリティ

カルケア、教育／評価、計画／評価、人間関係／コミュニケーション、専門職的発達の６項目で、これが看護実践能力の構成要素として示されている研究が多かった。ベナー[5]の７つの看護実践の領域も、6-DSが示す内容とほぼ同様であり、これらの研究の影響を受けて、国内の看護実践能力の研究は進められている可能性が高い。

看護基礎教育の立場からは、これらの構成要素を安易に鵜呑みにせず、よく吟味し、現代学生の特性を踏まえた教育方法に反映させていくことが重要である。例えば、「看護技術力」の低下や「コミュニケーション／人間関係形成」力の低下は、若者の生活が大きく変化し、「看護技術力」や「コミュニケーション」の基礎になる能力が育たないまま、大学に入学してくることもその一因になっている。そのような学生の学習ニーズを踏まえた、柔軟な教育方法が検討されることが望ましいと考える。

また、教育内容においては、リーダーシップやメンバーシップ、専門職性の要素は、看護基礎教育の中に明確に取り入れられず、卒業後に強化されている現状がある。これらを看護基礎教育の教育課程の中に取り入れる試みは新しく、したがって、看護基礎教育においてリーダーシップやメンバーシップ、専門職性の基盤となる能力を育成する必要性について、検討する価値は高いと考える。看護実践能力育成の可能性を秘めた試みとして、期待できるのではないだろうか。

３．看護実践能力に関する研究目的の動向

看護実践能力に関する研究目的を、看護基礎教育に活かす視点で分類したものが表２であるが、ここに取り上げた研究を研究対象別に考察する。

看護大学生対象の研究においては、看護実践能力そのものを問う研究は少なく、教育方法および評価に関する研究では看護学領域ごとのレベルで行われていたが、４年間の教育期間や卒業後の継続教育を視野に置いた看護実践能力育成方法を検討した研究は見当たらなかった。

大卒看護師（臨床経験３年以上）の看護実践能力を短大、専門学校卒の看護師と比較した研究から[36]は、「大卒看護師の実践能力は短大、専門学校卒者よりも低かった」という結果が得られている。看護基礎教育の中でも大学教育は、近年その数が急激に増加し、平成４年には14校であったが平成19年の現在は146校とほぼ10倍になり、平成20年には163校まで増加する見込みである。大学教育がこのように増加すれば、大卒看護師は特別な存在ではなくなり、臨床でその真価が問われる時代になったと考えなければならないだろう。

新人看護師を対象とする研究では、看護実践能力を獲得していく過程やその支援、到達度の評価や関連している要因などについて明らかにする研究が行われていた。新人看護師は、看護実践能力の低下が問題視されている存在[49]であり、したがってその育成に最も関心が向けられており、基礎教育との関連も強いが、そのような関心が研究目的へ反映していると考えられる。

研究結果からは、新人看護師の成長過程とそれに影響を及ぼす因子が明らかになり、新人看護師が支援を受けながら、リアリティショックなども経験しながら努力している姿が浮かび上がってくる。新人看護師の姿からは、看護基礎教育サイドからのサポートの不足が垣間見え、連携の強化が望まれる。

看護大学生対象の研究と新人看護師対象の研究の目的を比較すると、看護実践能力の育成に関する温度差が感じられ、看護基礎教育の努力が必要であることが改めて実感できる。新人看護師が看護師としてスムーズにスタートを切れる看護基礎教育は、学生のニーズや、社会的要請でもあろう。

看護師を対象とする研究からは、日常の看護実践の中から優れた看護実践の構造を明らかにする研究や看護実践上の課題を明らかにして教育方法にいかす研究などが行われていた。なかには、看護基礎教育の視点から日常の看護実践の自己認知を分析している研究[21]もあった。このような看護実践の場に立脚した研究は、看護基礎教育への示唆を得るという点で、活用価値が高く貴重である。

看護実践能力とは何かという問いの答えは、看護師対象の研究から導かれる可能性が高く、注目していく必要がある。また、看護基礎教育に求められる教育内容を明らかにする上でも、貴重な研究成果である。今後、研究成果が蓄積されることにより、新たな看護実践能力を測定する尺度の開発も期待される。看護実践の内容は、医療の場の急速な変化によって大きく変わっており、現状に即した尺度開発も必要と考えられるからである。

V．まとめ

1．看護実践能力に関する研究は、国内、国外でやや傾向が違い、それぞれの国の看護教育制度、資格制度、医療政策が関連しているものと推測された。

2．看護実践能力の定義を明確にしている研究は少なく、定義のある研究でも内容は統一されておらず、さまざまであった。構成要素は、6-DSの尺度が参考にされ、他には看護過程の展開能力、看護技術力、看護倫理観などをあげていた。

3．国内の文献の研究目的を看護基礎教育に生かす視点から考察した結果からは、大学教育での看護実践能力の育成は専門科目レベルで留まり、新人看護師への教育は評価、改善がなされ、新人看護師自身も努力していること、看護師の実践から看護実践能力の解明が進められていること、看護師も看護実践能力の向上を目指して評価、改善を進めていることなどが推測された。

おわりに

看護実践能力の研究では、看護実践能力を捉えるところから始めなければならず、それが最大の課題であることが確認できた。また、看護実践能力を育成する上で、看護基礎教育が果たすべき役割は大きく、大学教育の中で看護実践能力を明確に位置づけた上で、育成を進める方法を検討することが今後の課題である。

そのためには、看護基礎教育に関わる教員一人ひとりが自らの看護実践能力を振り返ることも、重要なアプローチである。看護実践能力の育成は、看護実践能力を示すことが求められるからである。

【引用文献】

（1）Abrams S: From function to competency in public health nursing, 1931 to 2003, Public Health Nursing, 21 (5), 507-10 (2004)

（2）朝倉久見子：神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録，臨床看護実践におけるコンピテンシー獲得の過程に影響する経験，230-236（2005）

（3）浅沼良子，柏倉栄子，柳原真智子，八重樫妹子，吉田和子，中川佳子，小泉裕子，浅野玲子，深谷真理子：中堅看護者の「看護実践上の課題解決」を目指した学習方法の一考察　実践に生かす看護理論をもちいた学習プロセスの分析，東北大学医療技術短期大学部紀要，11（1），105-114（2002）

（4）有森直美，中込さと子，溝口満子，守田美奈子，安藤広子，森明子，堀内成子，Holzemer William L.：看護職者に求められる遺伝看護実践能力　一般看護職者と遺伝専門看護職者の比較，日本看護科学学会誌，24（2），13-30（2004）

（5）ベナー：ベナー看護論　達人ナースの卓越性とパワー　医学書院（1992）

（6）Burke LE. Schlenk EA. Sereika SM. Cohen SM. Happ MB. Dorman JS.: Developing research competence to support evidence-based practice, Journal of Professional Nursing, 21 (6), 358-63 (2005)

（7）Canning D. Rosenberg JP. Yates P.: Therapeutic relationships in specialist palliative care nursing practice, International Journal of Palliative Nursing, 13 (5), 222-9 (2007)

（8）Chenowethm L. Jeon YH. Goff M. Burke C.: Cultural competency and nursing care: an Australian perspective, International Nursing Review, 53 (1), 34-40 (2006)

（9）Cross S. Block D. Josten L. Reckinger D. Olson Keller L. Strohschein S. Rippke M. Savik K.: Development of the public health nursing competency instrument, Public Health Nursing, 23 (2), 108-14 (2006)

（10）Dugger BH.: Development of the public health nursing competency instrument, Journal of Intravenous Nursing. 16 (4), 239-45 (1993)

（11）遠藤みどり，石田貞代，松下由美子，牛田貴子，清水惠子，村松照美，茂手木明美，小林たつ子：看護実践能力向上のための取り組み　臨地実習での技術項目リスト・チェック表の活用，山梨県立大学看護学部紀要，43-54（2007）

（12）Edwards PA. Davis CR.: Development of the public health nursing competency instrument, Journal of Continuing Education in Nursing, 37 (6), 265-9 (2006)

（13）藤野洋子：看護学生が老年観・看護実践能力を育むための実習指導を考える　老年看護実習での体験調査から，神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録，28号，152-159（2003）

（14）Farrand P. McMullan M. Jowett R. Humphreys A.: Implementing competency recommendations into pre-registration nursing curricula: effects upon levels of confidence in clinical skills, Nurse Education Today, 26 (2), 97-103 (2006)

（15）Gordon B.: Conservative sharp wound debridement: state boards of nursing positions, Journal of Wound, Ostomy, & Continence Nursing, 23 (3), 137-43 (1996)

（16）Huggins K.: Lifelong learning—the key to competence in the intensive care unit, Intensive & Critical Care Nursing, 20 (1), 38-44 (2004)

（17）細谷紀子，本間靖子，山田洋子，佐藤紀子，宮崎美砂子：学士課程における地区活動の看護実践能力習得をめざした地域看護実習方法，千葉大学看護学部紀要，29，33-41（2007）

（18）樋之津淳子，高島尚美，古市由美子，箭野育子，小池秀子，赤沢陽子：新人看護師6ヶ月迄の看護実践能力の修得過程の分析，筑波大学医療技術短期大学部研究報告，23，27-32（2002）

（19）本田多美枝：Schoen理論に依拠した「反省的看護実践」の基礎的理論に関する研究（第一部）理論展開，日本看護学教育学会誌，13（2），1-15（2003）

(20) 石野レイ子，野村幸子，三好さち子，唯保咲子，西山志津子：看護職者の看護実践に関する自己認知の分析，人間と科学広島県立保健福祉大学誌，3（1），59-69（2003）
(21) 稲垣美紀，土居洋子，西上あゆみ，西岡ひとみ：学部学生の卒業時における看護技術の習得状況（第1報），大阪立看護大学紀要，8（1），47-52（2002）
(22) 上泉和子監訳：アメリカ看護師協会「看護実践の範囲と基準」，インターナショナルナーシングレビュー，29（3），6-119（2006）
(23) 川嶋麻子，田中マキコ，井上真奈美，田中愛子，丹佳子，野口多恵子：看護基礎領域における基礎技術項目に関する教育内容の検討（1）技術演習を通じての技術到達度自己評価分析から，山口県立大学看護学部紀要，7，49-58（2003）
(24) 倉田節子：看護実践能力の育成を目指した小児看護技術演習における指導方法，日本赤十字広島看護大学紀要，4，19-27（2004）
(25) 厚生労働省：医療提供体制の改革のビジョンhttp://www.mhlw.go.jp/houdou/2003/04/h0430-3.html
(26) 厚生労働省：看護基礎教育充実に関する検討会報告書（2007）
(27) Khomeiran RT. Yekta ZP. Kiger AM. Ahmadi F.: Professional competence: factors described by nurses as influencing their development, International Nursing Review, 53 (1), 66-72 (2006)
(28) 道廣睦子，小野ツルコ，村上生美，矢嶋裕樹，香川幸次郎：ストーマ看護実践能力尺度の開発，岡山県立大学保健福祉学部紀要，11，21-30（2005）
(29) 武藤紀子，石川麻衣,山田洋子,牛尾裕子,宮崎美砂子：地域看護実践能力の向上をめざす到達目標を用いた学士課程の教育方法の検討,千葉大学看護学部紀要，26，51-56（2003）
(30) 増村美津子：看護婦（士）の看護技術における熟練過程，神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録，24，234-241（1999）
(31) Matthews E. Malcolm C.: Nurses' knowledge and attitudes in pain management practice, British Journal of Nursing, 16 (3), 174-9 (2007)
(32) 松田安弘，本郷久美子，中谷啓子，三浦弘恵，横山京子，廣田登志子，鈴木美和，亀岡智美，定廣和香子，舟島なをみ：看護学教員のロールモデル行動に関する研究，千葉看護学会会誌，6（2），1-8（2000）
(33) Mellor G. St John W. McVeigh C.: Occupational health nursing practice in Australia: what occupational health nurses say they do and what they actually do, Journal of the Royal College of Nursing, 13 (3), 18-24 (2006)
(34) 野呂瀬恵子：新人看護師の看護実践能力の修得過程の分析，神奈川県立保健福祉大学実践センター看護教育研究集録，32，190-195（2007）
(35) 内藤直子，藤井宏子，白井瑞子，佐々木睦子：プレテスト・ポストテスト時の母性看護実践能力の評価基準表と学生の変容，香川大学看護学雑誌，9（1），1-6（2005）
(36) 中岡亜希子，小笠原知枝，久米弥寿，鈴木雅子：大卒の看護師が認識している看護実践能力　短大・専門学校卒者との比較，日本看護教育学会誌，14（2），17 25（2004）
(37) 中野康子，張替直美，小林敏生：新卒看護師の臨床実践能力向上に影響する要因と取り組みに関する縦断的研究，山口県立大学看護学部紀要，8，99-108（2004）
(38) 南家貴美子，宇佐美しおり，有松操，梅木彰子，木子莉瑛，谷口まり子：看護ケアの質と看護実践能力との関連，熊本大学医学部保健学科紀要，1，39-46（2005）
(39) 野戸結花，皆川智子，川崎くみ子，山内久子，木村紀美：看護学生の看護基本技術の経験度と自立度，弘前大学医学部保健学科紀要，3，9-16（2004）
(40) 長友みゆき：平成10年度～平成12年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書，55-61（2001）
(41) 沖満恵，長吉孝子：看護師の看護実践能力を明らかにするための観察視点，看護学統合研究，5（1），1-8（2003）
(42) 大木信子：先輩看護師の新人看護師に対する臨床看護実践能力評価の視点　到達度及び到達期待の調査から，神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録，28，214-221（2003）
(43) Schwiria PM.：Evaluating the performance of nurses: a multidimensionalapproach, Nursing Research, 27 (6), 347-51 (1978)
(44) Porte-Gendron RW. Simpson T. Carlson KK. Van de Kamp ME.：Baccalaureate nurse educators' and critical care nurse managers' perceptions of clinical competencies necessary for new graduate baccalaureate critical care nurses, American Journal of Critical Care, 6 (2), 147-58 (1997)
(45) 志田清美：院内教育におけるスタッフの教育ニーズと院内教育参加に関する因子の探求　看護実践能力の自己評価によるアンケート調査より，神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録，28，263-275（2003）
(46) 白尾久美子，水谷聖子，小林尚司，柿原加代子，滝益栄，小塩泰代：新人看護婦（士）の発達過程と臨床看護実践能力の構成要素に関する基礎的研究　看護実践の能力に関する文献レビュー，日本赤十字愛知短期大学紀要，12，3-4（2001）
(47) 曽根志穂，高井純子，大木秀一，斉藤恵美子，田村須賀子，金川克子，佐伯和子：イギリスにおける看護師の教育制度の変遷と看護職の現状，石川看護雑誌，3（1），95-101（2005）
(48) 高橋俊江，山本美佐江，瀧口章子，叶井優子，石原照子，川野鈴子，花島具子：リーダー研修20年の歩みと今後の課題，看護展望，26（3），386-391（2001）
(49) 高島尚美，樋之津淳子，小池秀子，箭野育子，鈴木君江，赤沢陽子：新人看護師12ヶ月迄の看護実践能力と社会的スキルの修得過程　新人看護師の自己評価による，日本看護学教育学会誌，13（3），1-17（2004）
(50) 寺澤明子，戸村道子，稲岡文昭：赤十字看護大学教員および赤十字医療施設に勤務する中間看護管理者が看護師に期待する基礎的能力および大卒看護師に期待する看護実践能力，日本赤十字看護大学会誌，5（1），70-79（2005）
(51) 上田貴子，亀岡智美，舟島なをみ，野本百合子：病院に就業する看護師が展開する卓越した看護に関する研究，看護教育学研究，14（1），37-50（2004）
(52) 牛尾裕子，山田洋子，石川麻衣，武藤紀子，宮崎美砂

子：四年制大学の看護基礎教育課程における地域看護実践能力を高める教育方法の検討　地区活動演習の導入とその評価を通して，千葉大学看護学部紀要，27，29-30（2005）
(53) 山崎珠美，内海文子，新田壽子,児玉由美子，小櫻英子，山崎和代：新人看護師の就職時の看護技術チェック合格との経験との関連，九州国立看護教育紀要，7（1），33-37（2004）
(54) 八田裕紀子：臨地実習における指導者の資質について,神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録，28，132-137（2003）
(55) 吉田礼子，東則子，福土茂子，本多洋子：新カリキュラム卒業生の看護実践能力の評価　自己評価と他者評価を用いて，神奈川県立平塚看護専門学校紀要，9，46-57（2003）
(56) 吉田礼子，東則子，福土茂子，本多洋子：新カリキュラム卒業生の看護実践力評価　自己評価と他者評価を用いて，神奈川県立看護教育大学校紀要，25，67-77（2002）
(57) 吉田礼子：新卒看護師の看護実践能力と卒前教育における学習経験との関連から見た看護基礎教育評価　就職1年後看護師の自己評価をもとに，東海大学短期大学紀要，39，71-80（2006）
(58) 山田覚，齋藤美和：看護実践能力項目の重要度に関する一考察　臨床看護婦と看護学生を比較して，高知女子大学紀要，49，67-74（2000）